

通し番号	5254
------	------

分類番号	R06-99-32-10
------	--------------

底はえ縄調査からみた相模湾東部のトラフグ漁場評価	
[要約]本県地先海面でのトラフグ底はえ縄漁の実現性や深場での生態等を把握するため、相模湾東部においてトラフグの底はえ縄調査を行ったところ、葉山～鎌倉沖で釣獲があった。底はえ縄は、浮はえ縄と比べて2歳以上のトラフグが多く釣獲される傾向がみられ、葉山～鎌倉沖の水深60m以深は、底はえ縄の好漁場になり得ると考えられた。近年、高水温により秋季における浮はえ縄の漁獲量が減少しているが、水深60m以深はトラフグの適水温帯であり、魚価の向上する年末にかけて漁獲量増が期待できる。	
神奈川県水産技術センター・企画研究部	連絡先 046-882-2314

[背景・ねらい]

本県ではトラフグ漁獲量が増加しており、浮はえ縄による漁獲がその多くを占めている。2021年度には漁業者から「浮はえ縄は漁場を広く使い漁業者が密集するため、底はえ縄の漁場開拓をしてほしい」と要望があった。そこで、相模湾東部の水深30～125mにおいて、漁業調査指導船江の島丸による底はえ縄調査を2022年9～12月、2023年12月～翌3月、2024年8～12月に計12日間実施した。

[成果の内容・特徴]

- 1 底はえ縄は、江の島丸の漁労設備等に合わせて仕立て、調査地点ごとに1鉢を等深線に沿って設置した(図1、2)。3年間の調査のうち、城ヶ島沖では2日間実施したが、根がかりが多い上に潮流が速く、トラフグの釣獲はなかった。亀城沖では1日間実施したが、根がかり等はなかったものの、トラフグの釣獲はなかった。葉山～鎌倉沖では9日間実施し、60m以浅では根がかりすることがあったが、60m以深では根がかりはほとんどなかった。各年度の釣獲尾数およびCPUE(100本当たりの釣獲尾数)は、2022年度は6尾・1.3、2023年度は24尾・3.4、2024年度は42尾・5.3尾であった。本県における2019～2023年の3～4月を除いた浮はえ縄の平均CPUE2.8と比べ遜色ない釣獲率であった。
- 2 調査地点ごとに表層から海底直上までの水温を測定したところ、9～11月にかけて水深60m以深の水温が、トラフグ適水温の下限とされる16℃を上回ったことから、同期間にかけて底はえ縄によって深場へ漁場を拡大できると考えられた(図3)。
- 3 市場調査で測定した浮はえ縄釣獲物と比較したところ、底はえ縄は浮はえ縄に比べて全長55cm以上のトラフグが釣獲される傾向があった(図4)。

[成果の活用面・留意点]

- 1 10月以降、葉山～鎌倉沖の水深60m以深は、底はえ縄の好漁場になり得ると考えられる。また、同じ地形が続いている藤沢～茅ヶ崎沖のほか、似た地形である大磯沖（通称、瀬の海）も好漁場の可能性がある（図2）。
- 2 近年、高水温により秋季（10～11月）における浮はえ縄の漁獲量が減少しているが、底はえ縄では漁獲が見込まれると考えられる。
- 3 底はえ縄ではやや大型で単価のよいトラフグを漁獲できると考えられる。
- 4 葉山～鎌倉沖の60m以深でも漁礁が沈んでいる箇所があり、注意が必要である。

[具体的データ]

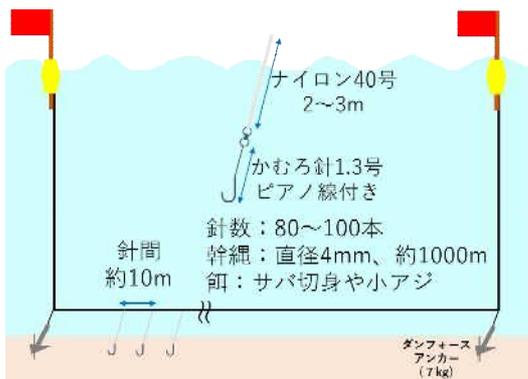


図1 底はえ縄概略図(1鉢分)

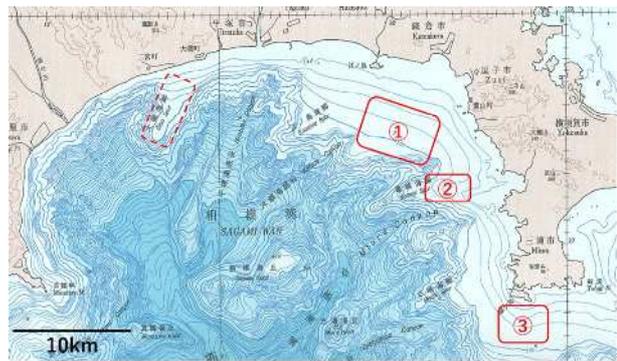


図2 調査海域

実線枠の①は葉山～鎌倉沖、②は亀城沖、③は城ヶ島沖、点線枠は大磯沖を示す。海図は水深 200m まで水深 20m ごとに等深線が引かれている。（海図は海上保安庁発行海図 6640 を複製）

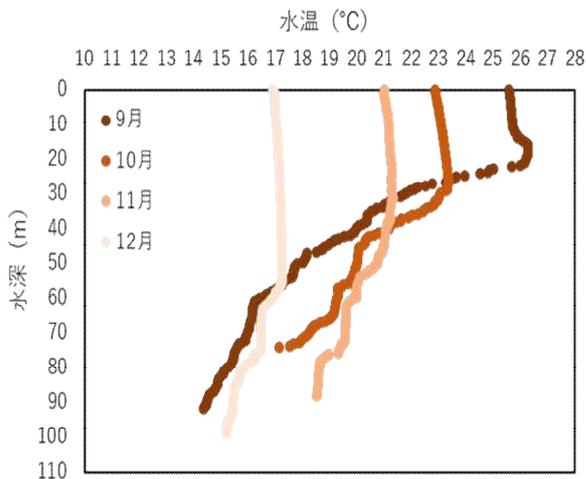


図3 水深-水温の月別推移
連続したデータが取れた 2022 年度の例を示す。

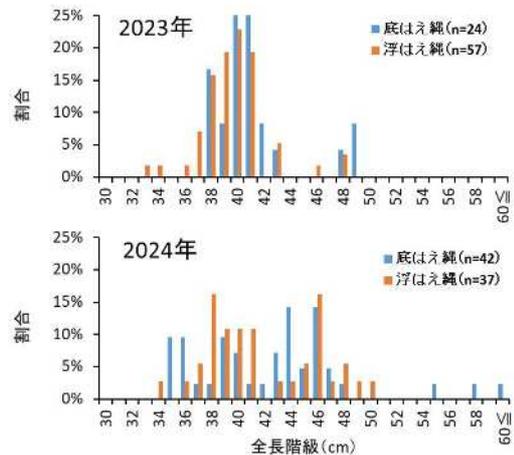


図4 年度別・漁法別のトラフグ体長組成
底はえ縄釣獲尾数の少なかった 2022 年度は除外した。

[研究課題名] 新栽培対象種の放流技術開発研究
 [研究期間] 2022（令和4）年度～2024（令和6）年度
 [研究者担当名] 加藤大棋（前）、櫻井繁（現）
 [協力・分担関係] 水産資源調査・評価推進委託事業により実施